



Title	酒田市立光丘文庫所蔵「蝦夷記」のアイヌ語について
Author(s)	佐藤, 知己
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 111, 95-118
Issue Date	2003-11-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34054
Type	departmental bulletin paper
File Information	111_PL95-118.pdf



酒田市立光丘文庫所蔵 「蝦夷記」のアイヌ語について¹

佐 藤 知 己

1. はじめに

筆者はこれまでアイヌ語の古い記録の調査を各地の図書館、文書館等について行い、既に多くの資料の所在を確認しているが、この一連の調査中に山形県酒田市立光丘文庫で見い出した「蝦夷記」と題されたアイヌ語彙集は、これまでに知られているいかなる同種の文献と比較しても、分量、内容両面において、アイヌ語研究上極めて注目すべきものであることが明らかとなった。以下にその概要を報告する²。

2. 「蝦夷記」の書誌的考察

「蝦夷記」は光丘文庫所蔵（目録番号 726）の写本で、和装本全十巻、各巻十七丁、外形は縦 23 センチ、横 16.5 センチである。各巻の表紙に「蝦夷記

¹ 本稿は平成 15 年度科学研究費（基盤研究（C）、「古文獻によるアイヌ語諸方言の研究」、研究代表者北海道大学大学院文学研究科佐藤知己、課題番号 12610547）による研究成果の一部である。

² 管見の及ぶ限りでは「蝦夷記」のアイヌ語についての研究はまだないようである。言語学的な研究としては、本稿が恐らく初めてのものではないと思われる。とはいえ、まだ不明の点が多く残っており、あくまでも暫定的な報告である。細部の研究は今後の課題としたい。

一」から「蝦夷記 十」までの題箋が付されている。また、1巻2表³には「蝦夷詞巻」という内題が記されている。第十巻の巻末(13表)には「千秋万歳 蝦夷記終 寛政乙七年 卯孟夏四月 写書 九冠」という奥書が記されている。各巻の巻頭に押された印から、この書が大正十三年に本間光彌氏から光丘文庫に寄贈されたものであることがわかる⁴。

原則として一丁に付き縦書き六行で⁵、各項目の初めには「一」もしくは「・一」が書かれており⁶、その下に片仮名で記されたアイヌ語、さらにその下に日本語訳が書かれている。総項目は1616項目である⁷。これらの項目は単語である場合もあるが、長い句や文のこともあり、極端な場合には数丁にわたる

³ 「1巻2丁表」をこのように表記する。以下同様。

⁴ 本間光彌氏は本間家八代目当主で光丘文庫の創設者。本間家の蒐書は本間家三代目当主光丘(1731-1801)、四代目当主光道(1756-1826)の時代から本格的に始められたが、明治期にも大量の書物が本間家の手に渡ったとされていることから(光丘文庫1986:110-11)、この書がいつ本間家の所蔵に帰したか定めがたい。本間家には光道時代の購書リストが所蔵されているとのことなので(同)、それらの記録の中に本書が含まれていないかどうか調査する必要がある。なお、酒田市立光丘文庫(2001:6)および酒田市史編さん委員会(1987:570-78)によれば、光丘は「本間様には及びもないが」と俗謡にまで謳われるほどの莫大な財を一代で築いたばかりでなく、公德の念に篤く、様々な社会事業に進んで私財を投じ、図書館の建設もその強い希望であったという。光丘文庫の名の由来ともなっている三代本間光丘こそは、「富めるものなれども、心ざしいやしからぬ」稀に見る人物であったと言える。

⁵ 後で述べる「松前嶋郷帳」の写本部分や申渡しはもっと詰めて書かれており、この原則に従っていない。なお、以下で「蝦夷記」の原文を引用する場合、横書きに改める。

⁶ 「一」と「・一」の違いが何を示すものかは今のところ不明である。

⁷ もっとも、この項目数は、「一」または「・一」を機械的に数えたものに過ぎず、実際には長い句や数頁にわたる文を一項目として数えている場合もある。また8巻4裏から9巻7表までの273項目は「松前御嶋御帳」の写本であり、それらの項目のほとんどは地名である。従って、単純に項目数イコール収録語彙数とは言えないという点に注意されたい。なお、田中、佐々木(1985:22)の集計に基づけば、「蝦夷記」の収録アイヌ語数は18世紀のアイヌ語彙集としては上原熊治郎の『もしほ草(藻汐草)』の収録アイヌ語数2740に次ぐもので、18世紀に年代を限れば、同規模のものは他にそれほど知られていないと思われる。

一つの文書（主として申渡し of アイヌ語訳文）である場合もある。稀に「人倫」（1巻4表）、「病氣名」（3巻7裏）のように、部類が立てられている場合もあるが、これ以外に部類分けはされていない。色の名前や身体部位などがそれぞれひとまとまりにされているように見える場合もあるが、徹底されておらず、組織的な原則に従って部類分けが行われているわけではないようである。8巻4表から9巻7表までは語彙集ではなく、「松前御嶋郷帳」の写本である⁸。9巻15表から10巻12裏までは申渡し of アイヌ語テキストである⁹。

既に述べたように、奥書から、この書が「九冠」（おそらくは雅号と思われる）という人物によって寛政七（1795）年に書写されたものであることはほぼ間違いないが、この人物についてはこれまでのところ何もわかっていない。

この書の成立に関する他の情報としては、他に本文中にみられる年号、地名がある。例えば、以下のように、「瀬田内」、「く寿り」、「志りぶ可」、「おしやまんべ」などの地名が見られる。これらの地名がどこを指すのかは今後の研究を必要とするが、少なくとも筆者や文献の性格を知る上で手がかりにはなると思われる。また、「寛文酉ノ年」、「明和五年」という年号も見られるが、前者は1669年、後者は1768年であり、年代の開きが大きすぎる。あるいは前者の関連部分は筆者の異なる別の文献から写されたものであるとも考えられる。いずれにせよこれらの年代は、「蝦夷記」の成立を考える上で、大きな問題を投げかけるものである。以下に関係部分を示す。

⁸ この「松前御嶋郷帳」の写本はアイヌ語彙集の途中に、前後の内容とは無関係に唐突に現れる。なぜこのようなことが起こったのかは「蝦夷記」という書物の成立を考える上で興味深い問題である。ちなみに、「蝦夷記」所載の「松前御嶋郷帳」は、『国書総目録』（国書研究室1990：470）に記載のある「松前島郷帳」の内閣文庫本（いわゆる天保郷帳）、北大本（活字本『続々群書類従』9に収録）のいずれとも内容が異なる点に注意される。すなわち、「蝦夷記」所載の「松前御嶋郷帳」には、地名の他、領主名等の情報が付加されている。

⁹ なお、5巻8表から9巻裏にも同様な申渡し of アイヌ語テキストが書かれている。なぜこのような無関係な位置に置かれているのかはやはり興味ある問題である。

- 一 先年瀬田内ト申処へ賣買の爲參候節其年尔ハ
- 一 疱瘡時逸て夷人夥敷及死亡候依之心願ヲ
致ニ而此通蝦夷共へ申聞翌年弁才天尊躰
持參則社共ニ建立致嶋尔跡ヲ祭させ給ふ
其迄ハ瀬田内と申処尔弁才天尊躰無之たゞ
近遠僧寺斗ニ而有之候ヲ三尺四面尔社造立
致棟札等ヲ納置候其年津波打候得共社流
- 一 不申候尔今是ヲ始メトス寛文酉ノ年七月上旬
津波ハ七月十九日其後予く寿りと申下蝦夷地
參候而弁才天神躰寄進造立ス是ハ往古ハ
神躰無之故造立シテ爰尔記置也

(2 卷 13 裏～14 表)

- 一 明和五年子八月志りぶ可と申処の蝦夷御目見之節
御勘定御奉行春山運右衛門様御尋被遊候而御宿子之於間ニ
御見せ被遊候蝦夷道具御家蔵ニ有之候得共未タ此名
不相知依而蝦夷共江尋可申様ニと御渡被成候則蝦夷共江
相尋申候得は成程夷の宝ニ而其名有之候但今蝦夷
之处ニ者無之由申候地金ハ薄鉄ニ而銀細工ノモヤウキセ
もの也其形爰尔出ス

(6 卷 7 表)

- 一 予於舍満部ト云所エ參候其節おしやまんべの濱中エ
- 一 寄木塚ト云テ寄木のおひた、敷誰積となく有所
あり秋の頃大荒ニ而流レけるも又元の如く人の積たる
よふに積重あり是ニ依て爺老言葉に寄木塚ト云
此事夷に尋けレバ往古より幾度其流候得共又元の
如く積重如山成る一夜の内に如元のはニツ子
カムキノ名所也ト依て是ヲ根津志夜ト蝦夷ハ

一 申なんかたりき

(2 巻 11 裏～12 表)

一 エモンタシヤ 敵打杯之事

惣而今ハ返答寿る人皆エモンタシヤト返礼ニ言大ィ成非也
夷杯打合之時打負又其返報ヲ打事ヲ云由予
ヲシヤマンベニ而夷ニふ志ん申可けら連こまり候故ハダヲ
覺たり通詞職ニ而も誤有也能ル可問尔シクハナシ

(4 巻 16 裏)

通詞第一の要文故エ

御目見之時之詞第一記也

御通詞之稽古肝要也

(9 館 16 表)

既に述べたように、「蝦夷記」が一人の著者の手になるものであるのかどうかも現段階では明確でない点があるのであるが、少なくとも通詞の手になるアイヌ語資料が含まれているということは上の箇所からも明らかである。北海道 (1970:134) によれば、松前藩の正式な職制の中に「通詞」が位置付けられており、「蝦夷記」の著者 (の少なくとも一人) も、このような通詞の一人であった可能性が高いと言える。今後、歴史資料とつきあわせることによって、「蝦夷記」の成立年代や筆者の推定をさらに進めて行く必要がある。

3. 「蝦夷記」の表記と内容

以下、「蝦夷記」の具体的特徴について、日本語、アイヌ語の両面から述べていくことにする。

3.1. 日本語について

日本語部分の表記の詳細な分析は今後の課題であるが、多くの変体仮名が

用いられており、たとえば「あ」とならんで「阿」,「か」とならんで「可」のように、複数の仮名が用いられている。したがって、同じ語が別の表記で書かれている例もある。例えば、「呉れ」は「く連」とも「くれ」とも書かれ、「する」は「寿る」とも「する」とも書かれている。ただし、全く無秩序に仮名が用いられているのかどうかは問題であり、アイヌ語の表記との関連も含め、なんらかの原則が存在しないかどうか、さらに検討を進める必要があると思われる。

訳語の日本語には、幾分古風と思われる形が現れる。このことは本書の成立年代を考える上でも一つの参考になる事実と思われ、今後、全体にわたって本格的な検討を行う必要がある。以下にいくつか例をあげる。

居子ブリ（意味は居眠り）（4巻7表）：（例証は名義抄¹⁰）

影事（意味は陰口）（5巻7裏）：（例証は日葡辞書¹¹）

インキヤウ（意味は陰茎）（7巻12裏）：（例証は下学集¹²）

のんど（意味は咽）（7巻12裏）：（例証は和名抄¹³）

なお、「イタンゲ 常ぎ王ん」（7巻5表）とあるが、これは、最古のアイヌ語彙の一つとされる「松前ノ言」の「い多き ちやうき」と同一の訳語である可能性が高い。この「常ぎ王ん」、「ちやうき」は、『日葡辞書』の「定器ヂヤウギ ある人が飯を食べるのにいつも用いる木製の椀」（土井他、1980：318）と同じものであろう¹⁴。現在のところ、最古のアイヌ語彙（寛永年間[1624-1644]の書写か。佐佐木[1925]による）と言われている「松前ノ言」

¹⁰ 天理図書館善本叢書和解部編集委員会（1976：182）によれば「キ子フリ」（ただし声点は省略）。

¹¹ 土井他（1980：78）によれば「Caguegoto かげで人の悪口を言うこと」。

¹² 山田（1968：70）によれば「インキヤウ」。

¹³ 馬淵（1973：294）によれば「乃無止」。

¹⁴ 佐藤（1998：51-52）では「重器」ではないか、という推定を述べたが、これは「蝦夷記」の出現によって、誤りであったことが判明した。

と訳語が共通している点は注目に値する。

3.2. アイヌ語について

次に、現段階で気の付いた範囲で、「蝦夷記」所載のアイヌ語の主な特色を、表記、内容の両面から述べる。

3.2.1. 誤写の可能性について

「蝦夷記」は語彙数や内容から考えて、アイヌ語研究上重要な価値を持つ文献であることは間違いないと思われるが、また一方で単純な誤写と思われるものも決して少なくない。一例をあげれば以下の如くである。

ノチリ「星ト云事」(1巻2表)：ノチウの誤写か。

レウ「風ト云事」(1巻2裏)：レラの誤写か。

ルウチン 峠之事(9巻11表)：ルウチシの誤写か。

ホクユル 夫ト持事(9巻13裏)：ホクコルの誤写か。

チラフカ 東 右同断(9巻14表)：チュフカの誤写か。

このことは、「蝦夷記」を利用する上で常に考慮しなければならない点であると言える。

3.2.2. 注意すべき表記

表記についてはまだ細かな分析が進んでいないので、決定的なことを言える段階ではないが、気の付いた点をいくつか述べる。

まず、表記の全体的な特色について言えば、アイヌ語の表記は、ほとんどすべて片仮名で書かれているが、2節で述べた「申渡し」のアイヌ語訳文だけは、変体仮名で書かれているという点は注目に値する。このような仮名の使い分けが何を意味しているのかは興味深い問題である。あるいは、アイヌ語・日本語対訳語彙の部分と、申渡しのアイヌ語テキストとは、異なる資料に基づいている可能性もあると思われ、今後、様々な角度からの全体的な検

討が必要である。

次に、個々の表記についてであるが、まず注目されるのは、特殊な文字の使用がみられる点である。「蝦夷記」には、「セ°」という特殊な表記が少数ながら現れる¹⁵。

ウウセビツセ° ぬり物ノハゲタル事（6巻3表）：ussi epitce<ussi「漆」（沙流方言¹⁶），epitce「秃げている」（服部1964：2）

セ° プパア 魚の川ヲ下ル事（6巻11裏）：cep「魚」（服部1964：93）¹⁷

セ° ツペライ 肴ヲ釣事（8巻3裏）：cep peray<cep「魚」（同上），peray「釣る」（服部1964：113）

「セ°」が用いられたアイヌ語文献としては他に上原熊治郎『藻汐草』（寛政四[1792]年）がある（65丁表 蕨 王らび セ°フマキナ）。文献の年代が近いことを考慮すれば何らかの影響関係を考える必要があるかもしれない。もっとも、『藻塩草』で用いられている「ツ°」という表記は「蝦夷記」では用いられていない¹⁸。

また、pirka「良い」（服部1964：323）に相当する形式には、「ひるか、飛る可、飛る可、ぴる可、ヒルカ、ピルカ」のように実に様々な表記が用いられ、用例も多いが、このrを「リ」で表記した例はない。その一方で「シリクン子」（sirkunne「暗い」服部1964：225）のような表記も見られるのは興味深い。佐藤（1999：56-57）が指摘しているように、「松前ノ言」においても、

¹⁵ 「ベッセ」（hetce「合いの手を入れる」か）（5巻10裏）のように「セ」の例もある。なお、「蝦夷記」よりも年代が古いと思われる「松前ノ言」では「セ°」は用いられず、「ちゑ」のような表記の例が見られる（14裏 ちゑ川ふ 可らさけ事）。

¹⁶ 沙流方言と記した形式は筆者が上田トシ氏からご教示いただいた形式。

¹⁷ 語形の引用にあたっては、特に必要のない限り、喉音音素、アクセント記号は省略する。また、方言名も省略する。

¹⁸ 「蝦夷記」では「ト」や「ツ」が用いられている（例：1巻4表 アトイ 海ト云事、1巻6表 ツレシ 妹ト云事）。

pirka は「びる可」, sirkunne は「志りく川ね」であって, 「蝦夷記」と基本的な単語の表記において類似した状況を示している点が注目される。

3.2.3. 注意すべき形式

現在知られているアイヌ語の形式と, 何らかの点で異なっていたのではないかと考えられる例としては, 以下のようなものが注意される。

パルケシヨ 男座敷ト云事 (1 巻 9 表)
アプン 居所へ上レト云事 (3 巻 3 表)
アプン 入ニハ皆通ス 船之入事 (7 巻 8 裏)
アプンゲ 呼¹⁹ (2 巻 16 裏)
アプンゲ よふト云事 (2 巻 15 表)
アプツパ 俄雨杯降人ノ雨宿リヲ内へ入レト云事 (3 巻 3 表)
ペツセ 脇より者屋寿事 (5 巻 10 裏)
ポブニ フキロト云事 (4 巻 9 表)
ポブンバ 立ト云事 (4 巻 9 表)

これらは harki「左」(服部 1964: 237), ahun「入る」(服部 1964: 243), ahunke「入れる」(服部 1964: 243), ahup「入る(複数形)」(服部 1964: 243), hetce「英雄叙事詩に合いの手を入れる」(千歳方言²⁰), hopuni「起きあがる」(服部 1964: 24), hopunpa「起きあがる(複数形)」(服部 1964: 24)に当たる形式(または含む形式)であろうが, ha, hu, he, ho に「パ」, 「プ」, 「ペ」, 「ポ」が対応している。誤写の可能性も皆無ではないので, 単純に, *apun のような形式をこれらの形式に推定することは危険であるけれども, 少なくとも「パ」, 「プ」, 「ペ」, 「ポ」という表記が妥当と感じられるような, 現在の発音とは異なる, 何らかの音声的な実質を反映したものである可能性

¹⁹ 原文は長い句なので一部を取り出して示した。

²⁰ 千歳方言と記した形式は筆者が白沢ナベ氏からご教示いただいた形式。

は皆無ではないと思われる（例えば [Φ] または [f] で発音されていた等）²¹。
また、次のような例がある。

- ヲツカイ 御手前ト云事（1巻8表）
- ホカンボ 六ヶ敷重々敷ト云事（1巻13裏）
- ヲツタランテ 奉ル事（2巻10裏）
- ボラカラ 物のからい事（3巻10表）
- モウシヤケ アクビ之事（3巻10表）
- シヒンボヤン ま可なへハ出立之事（4巻6表）
- イヒクラバヲフルノエツケ 静ニ忍で古いと云事（5巻5表）

これらは aokay 「あなた」(服部 1964: 308), hokanpa 「むずかしい」(服部 1964: 161), ante 「脱ぐ」(服部 1964: 88), parkar 「からい」(服部 1964: 98), mawsok 「あくび」(服部 1964: 10), sipinpa 「身支度をする」(静内方言²²), apunno 「静かに」(服部 1964: 285)に相当するもの、もしくは相当する形式を含むものと思われるが、それぞれ a に「ヲ」、pa に「ボ」、ma に「モ」の仮名が用いられている。すなわち、現在の a に o が対応しているように見える。他方、次のような例もある。

- ラバケタ 其内ニと云事（5巻9裏）

²¹ もっとも、現代のアイヌ語の発音においても/hu/は通常 [Φu] であるが。また、日本語からの借用語とみられる patci「鉢」(千歳方言)のような例を考慮すると、単純に [Φ] を仮定することにはやはり無理があるかもしれない。この借用においてはおそらく日本語の [Φ] に p を当てたと考えられるが、これはこの時代にアイヌ語に [Φ] が存在したという仮定とそう簡単には適合しない。また、[f] の仮定にも問題がある。服部 (1960: 318) の、f から h への弱化は、それほど一般的な現象ではない、という指摘も考慮する必要がある。今後の検討課題としたい。

²² 静内方言と記した形式は筆者が織田ステノ氏からご教示いただいた形式。

これは rapokita「そうするうちに」(千歳方言)に相当するものとみられるが, po に「パ」が対応しており, 上の例とは逆に, 現在の o に a が対応する例である(なお, 上記「モウシヤケ」も参照)。このような表記の理由については今のところ不明とせざるを得ないが, やはりなんらかの音声的な実質(調音点の違い等)を反映している可能性は考慮する必要があると思われる。また, 次のような例がある。

ツキシリカムレ うツふし尔寝るとゆふ事 (4 巻 8 裏)

ツボロ 筋子之事 (7 巻 9 裏)

ポツケ, ツミツプ 夜着ふとん類 (7 巻 9 裏)

カハツリ わし之事 (7 巻 16 表)

アマムツカツプ 寿、め之事 (7 巻 16 裏)

ツウ 能やけ多事 (8 巻 2 裏)

ヌンナル 坂之事 (8 巻 11 表)

これらはそれぞれ, cisirkamure「伏せる」(千歳方言), cipor「魚の卵」(服部 1964: 93), hotke cimip「ふとん」(服部 1964: 104), kapacir「わし」(服部 1964: 188), amamecikap「すずめ」(服部 1964: 189), ci「煮える, 焼ける」(服部 1964: 97), ninar「坂」(千歳方言)に相当するものであろうが, /ci/, /ni/に「ツ(キ〜ウ)」, 「ヌ」が対応している。「チセ ヤカタ トモ云家之事 (8 巻 3 表)」のような例もあるので, /ci/に常に「ツ」が対応するというわけではなく, これらはたとえば, 佐藤 (1995: 11) が指摘したような, 「チ」と「ツ」の発音上の区別を持たない日本語の方言話者によって記録された, というような可能性も勿論考えられる。しかし, 他方, 音韻論的解釈は別として, これらの音が [tʃi], [ɲi] ではなく, 口蓋化のない [tsi], [ni] のようなものであった可能性も皆無ではないと思われる。

また, 以下のように, 佐藤 (1999: 86-87) が「松前ノ言」について指摘した, 長母音を表したとみられる表記が「蝦夷記」にもみられる。

- モウナク 寝ヌト云事（4巻9裏）
- トウカプ 昼ト云事（4巻9裏）
- ヌウマ 昨日ト云事（4巻11表）
- ホシケヌウマ ヲト、キト云事（4巻11表）
- スイベ 鮭魚之事（7巻8裏）²³
- フウレ 赤之事（7巻10裏）

これらはそれぞれ, mōnak 「目が醒めている」(服部 1964 : 25), tōkap 「昼間」(服部 1964 : 253), nūman 「昨日」(服部 1964 : 247), hoskinuman 「おととい」(服部 1964 : 248), sipe 「さけ」(服部 1964 : 191), hūre 「赤い」(服部 1964 : 282) に相当するものであろう。これらの表記が意味するところも、さらに検討する必要がある。

また、次のように、一群の形式というよりはむしろ、ある語に特有な語形の「ずれ」がみられる場合もある。次の文例におけるヤイラゲレ、ヤキラゲ、ヤイラケレという語形に注目されたい。

- 一 ハアヤイラゲレ タフ子イキ ヲンクシュ
- 一 カクシ カムキ ヤキラゲハ 子アキ子
- 一 モシリ エコセン子 エカシ カムキ ヌウナン
- 一 コンナ ハアヤイラケレ
- 一 是ハ近頃志シ忝存手前も祝敷掌發致ス此志
- 一 何とも忘スレヌト云心也

(2巻14裏)

この形式は、文脈から考えて iyayraykere 「ありがとう」(服部 1964 : 358), yayirayke 「感謝する」, yayrayke 「同」(服部 1964 : 358) に相当する

²³ なぜ「シイ」ではなく「スイ」なのかは不明。/ci/に「ツ」が対応する例があることと考え合わせると興味深い。

形式と考えられるが、微妙に語形が現在知られているものと異なっている。興味深いのは、形が極めて類似しているにもかかわらず全く別の意味である「自殺する」に相当する形式のほうは、次のように現代とほぼ同じと思われる形が記されている点である。

ヤイライケ「首ッくゝり死多る事」(3巻15表)

もちろん、これだけではなんとも言えないが、古くは「感謝する」と「自殺する」が形の上でも明らかに異なっていたのが、語源俗解等の原因によって同形に置き換えられてしまった可能性もあると思われる²⁴。

同様な例としては、チャアラゲ(チャアラケ、ジャラケとも)という形があげられる。この語は「蝦夷記」では次のように説明されている。

- 一 蝦夷ノ方より何楚貫候時返礼ノチャアラゲ言葉
- 一 口上チャアラゲト言事ハ改而急度云言葉也

(2巻14表)

語形や上の説明から考えて、この語は現在の *cáranke* 「談判する」(千歳方言) という語形に相当するものとみられるが、これも語源俗解等によって新しい形に置き換えられた例と考えられる可能性がある。すなわち、**cárake* あるいは **caarake* のような形式がかつては存在していたが、語構成が話し手にとって明確でなくなったために *caranke* (ca「口」、*ranke*「下ろす」) のような形式が新しく生まれ、それに取って代わられた可能性がある。なお、佐藤(2003:36) が既に指摘しているように、『藻汐草』でも「チャーラケ 切り口上」、「津軽一統志」でも「ちやあらけ 言葉の子細を云立仕候事」のような形である点が注目される。

また、次のように、現代のアイヌ語資料では語義や用法が必ずしも明白で

²⁴ もっとも、「松前ノ言」では「やいらい介れ」、『藻汐草』でも「ヤイライケレ」である。

ない、難解な形式の解釈に役立つのではないと思われる例もある。

一 イラム。カルハレ

脇ノ吊杯いふ事

但是ハとうてんし多といふ事

(6巻5裏)

一 イランカルパレ

盜テ買船杯来見付心直シニ

物少カも出セト云事

(5巻4裏)

大谷(2003:100)によると、門別方言の話者松島トミ氏の昔話には iram-kanpare (大谷によれば実際の発音は「イラムガンパレ」に近い発音) という形式が現れ、松島氏によると「どうするべ、大変だ」のような意味を表すという。この形式はこのままでは形態素分析が困難な形式であり、また、これまでのところ、現代の諸資料には見いだされず、例が少ないこともあって音形や意味についての疑義が皆無とは言えない面がある。しかし、上記の「蝦夷記」の説明のうち、「脇ノ吊」は必ずしも意味が明らかではないけれども、「とうてん」が「動転」を意味するとすれば、形は異なっているとはいえ、もともと同じ形式である可能性がある。興味深いのは、「蝦夷記」には、表記が多少違っている点は問題であるけれども、ほぼ同じ表記で、別な意味を表したと見られる例(上記の二番目の例)も見られることである。ひょっとすると、同一の語とすべきかどうかは別として、これらの例は、「人を動揺させる」のような意味と、「人に配慮させる、気を遣わせる」²⁵ のようなかなり異なる意味とを表す、*i-ram-karpare (人に心を何度も回転させる) のような形式がかつては存在したことを示すものではないだろうか。同音異義と認識されるようになったために忌避されるようになって、それぞれ他の形式に取って代わられたが、門別方言では「大変だ」という意味の形式として、かろうじて残存している、ということではないだろうか。また、使われなくなるにつれて、語構成の意識も希薄になったと思われる、そのため、他の形式(たとえば

matkosanpa 「パツと飛び起きる」(田村 1996:380) などの「混交」が生じ、その結果生まれた形式が現在の門別方言の iramkanpare という形式である可能性がある。以上、単なる憶測に過ぎないが、今後、資料の蓄積をさらに進めて、研究する必要があると思う。

表記と並んで語彙の全体的な分析も今後の課題であるが、例えば以下のように「松前ノ言」と一致する形式がみられる点は興味深い。

一 シヨイ子 又ヲシピ トモ 又 ヘトフ トモ 帰ルト云事 (4 卷 14 表)

現代のアイヌ語資料に、これと完全に一致する形式を見いだすことはまだできていないが、これは「松前ノ言」の「遍とぶ者 とり可へさうといふ事」(3 表) と同じものであろう。

また、次のような例もある。

一 ヲツカイ 若ィ男ト云事 (8 卷 3 裏)

これも、「松前ノ言」の「おん可い わらん遍^{*}の事」(11 表) に対応するものである。佐藤 (1999:72) でも指摘したように、「壮年の男」というよりも、もう少し若い男を指しているらしい、という点が興味深い。ちなみに、「津輕

²⁵ 全く同じ語形ではないけれども、鳥居 (1903:146) には iramkarubaru 「心」という形式が記録されている。我田引水になるが、この場合は「配慮する、気遣う」という意味の形式として千島方言に残存していたのではないか。研究を要する。(なお、校正の段階で、中川裕氏より、ディボフスキーの辞典を確認した方が良いのではないかと、との御示唆を受けた。そこで、Radlinski (1891:82) 所載のディボフスキー採集千島方言資料を確認したところ、iramkarpar myšleć; putare, cogitare とあるのを発見した。ポーランド語、ラテン語の訳語から見て、ここで述べた推測をほぼ裏付けるものと言って良いであろう。ちなみに、村山 (1971:166) の iramkarkar は誤り。)

一統志」(北海道 1970:149)でも「おつかい 若輩の男狄」とある。また、1620 年頃に記録された、最古のアイヌ語資料の一つであるデ・アンジェリスの資料でも「minino (少年) occay」とある (チースリク 1962:99)²⁶。

3.2.4. 種々の注記について

「蝦夷記」は、アイヌ語と、それに対応する日本語をあげるだけでなく、注記を付けている例が数多くみられる。それらは大別すると、文法や語の意味に関するもの、地域や場面による言語差に関するものが多い。以下にいくつか例を示す。

- ・一 チヨカイ 手前ト云事
 - ・一 エン ア ト ク ト 云 何レモ我ト云言葉也然共物ニより所
ニよりて聞よしアリ六ヶ敷所也
- (1 巻 8 裏)

上の例は、人称代名詞の他に、人称接辞 en-「私を」、a-「我々が」、ku-「私が」の存在を指摘したものとみられる。無論、言語学的な理解とは程遠いものであろうが、人称接辞に特に言及した、最も古い文献ではないかと思われる。

注記の中には、当時の方言差を示したと考えられるものも見られる。

- 一 ポツチコ 同 少キ事 但からふと之言葉也
- (5 巻 2 表)

上の例は、haciko「小さい」(服部 1964:270)に相当するものと思われるが²⁷、現代でも樺太方言にみられる形式であり、「蝦夷記」の注記と一致して

²⁶ ポルトガル語及びアイヌ語の表記は巻末の翻刻による。ちなみに、上原 (1792:13 表) には「男 ヲツカイ」とある。

いる点が興味深い。

一 ベンㇿ 合点してうなづく事 かくし言葉也

一 ランノンノ 同 常ノうなづく也

又ペベンコツ トモ云

但シコツ言葉也

(3 巻 15 裏)

上の例では、「ペベンコツ」は、henkotpa「うなづく」(千歳方言、また、田村 [1996: 183] によれば沙流方言にも) と関係のある可能性がある。もしそうだとすると、「シコツ」を地名と考えて、現在の「支笏」にあたると仮定しての話ではあるけれども、やはり「蝦夷記」の注記と矛盾しない例と言える。また、その単語が使われる場面を注記したとみられる例もある。

一 ウンチ 常ニハアベト云 火ト云事 (6 巻 2 裏)

unci「火」(服部 1964: 105) は、宗谷方言、樺太方言でしか報告がないが、「蝦夷記」では、unci に対し、ape「火」(同) が日常語である、という捉え方をしているらしい点が興味深い。

・一 アイヌ 夷ト云事

・一 アイヌヒト

但夷ジャラケ言葉也 右ニ同

・一 ウンカツコルベ 右同断

カクシ言葉也

(1 巻 4 表, 裏)

²⁷ もっとも、語頭の「ポ」は ha に対応しており、これについては前節参照。

上の例では、アイヌヒトが「ジャラケ言葉」であると注記しているが、このことは、aynu-pito「人間」が「雅語」である、という現代の記述（知里 1954 [1976] : 465）と矛盾しない。また、ウンカツコルベはこれまでのところ、対応する語形を見いだせずにいるが、unkatkorpe<un- 我々を, kat 姿, kor 持つ, pe もの（＝我々の姿をしているもの）という形式が推定でき、一種の婉曲表現であることが推測できる。「蝦夷記」の「ジャラケ言葉」, 「カクシ言葉」といった注記がいったい何を意味しているのかはなおも検討が必要であるが, 「日常語」, 「雅語」, 「忌み言葉」のような区別が古くは今日知られている以上に存在したことを窺わせる, 興味深い資料であるということができる。

3.2.5. テキストについて

既に述べたように, 「蝦夷記」は単語や句だけでなく, テキスト資料も含んでいる。難解な箇所も多く, 詳細な分析はやはり後日を期したいが, ここではその一部を示す。

テキストは大別すると「申渡し」のアイヌ語訳文と, それ以外のものとに分かれる。それらのうち, やはり注目されるのは, 日本語をアイヌ語に訳したと思われる申渡しのテキストよりも, それ以外の, より自然なアイヌ語表現を含んでいると思われるテキストであろう。それらの中で特に重要なものとしては, 神への祈り言葉があげられる。書写年代が明らかな資料としては, おそらくこれまでのところ最も古いアイヌ語の祈り言葉の資料であると思われる。以下に原文とその注解を示す。

所ノ神エ御酒上ルチャアラゲ言葉左に有

- | | | |
|---|-----------|------------|
| 1 | タバントノトカムイ | 今此酒ハト云事 |
| 2 | アツイカマエクワ | ハルダ海上ヲヘテト云 |
| 3 | タハンモシリ | 此所エト云事 |
| 4 | テムコロルケ | 積来ルハト云事 |
| 5 | コヤレトノト | よろこハ敷ミキワト |

6	クテケハレカムイ	神ノまねぐにと云事
7	クエラエニウケシ	我々ヲ御助ト云事
8	タフ子アंकシユ	ナサル、ニ依而ト云事
9	イナヲカムイ	幣ヲ神、エ奉所
10	イヨマアシコル	神納受ナサル、事
11	カムイテンコル	神の御座所ヲ云
12	クイヨマレタフ子、アंकシユ	手前杯神酒ヲ捧ニ依テ
13	フシコエチウノ	嚙ノアラン限りハト云
14	チヨケカムキ	御荷物ハ宝ナレバト云事
15	エ、子コインカルカル	神ノ上覧ニ依而ト云
16	アリアナキ子	長く不役ト云事
17	ツケシハタ	二年モ
18	レケシハタ	三年モト
19	カムイノミハ	神酒ヲ捧ル内ハ
20	子アキ子	打ツ、き
21	フシコエチウノ	ヒサシクト
22	エシツ	守事
23	カマナンコロ子ナ	謹ナサル、テ有ふト云事

(2巻7表～9表)

1 : tapan tonoto kamuy 「この酒の神」<tapan 「この」(千歳方言), tonoto kamui 酒の女神」(久保寺 1992 : 277)

2 : atuy kama ek wa 「海を越えて来て」<atuy 「海」(千歳方言), káma 「越えて」(千歳方言), ek 「来る」(千歳方言), wa 「て」(千歳方言)

3 : tapan mosir 「この国」<mosir 「島, 国」(千歳方言)

4 : temkor orke 「中」<temkor 「一抱え」(久保寺 1992 : 271), orke 「所」(千歳方言)

5 : koyan tonoto 「上陸した酒」<koyan 「上陸する」(千歳方言) (「レ」は誤写か)

6 : ku-tekepare kamuy 「私が手に入れた神」<ku-tekepare 「私が手に入る」(静内方言)

7 : ku-erayniwkesh 「私が助かる (?)」<Erainiukesh 'to persevere in' (Batchelor 1939 : 125)

8 : tap ne an kusu 「そうであるので」<tapne an 「かくかくだ」(久保寺 1992 : 209), kusu 「ので」(千歳方言)

9 : inaw kamuy 「御幣」<inaw 「御幣」(千歳方言), kamuy 「神」(尊称?)

10 : iyoma askor 「入っている酒 (?)」<iyoma 「中へ入ってくる」(久保寺 1992 : 113), askor 「どぶろく」(中川 1995 : 7)

11 : kamuy temkor 「神の中」(4行目参照)

12 : ku-iyomare tap ne an kusu 「私はお酒を注ぐ, だから」<iyomare 「酒を注ぐ」(千歳方言)(ただし, 動詞価の点で問題がある。)

13 : husko eciw no 「いつまでも (?)」<husko 「古い」(千歳方言), eciw no (?)

14 : ciyoki kamuy 「交易品」<ciyoki 「交易品(毛皮)」(千歳方言)

15 : e-en-ekoinkarkar 「おまえが私を見守る」<e-en- 「おまえが私を(静内方言)」, ekoinkar 「見守る(千歳方言)」

16 : ari an yakne 「というのであれば (?)」<ari an 「という」(静内方言), yakne 「ならば」(千歳方言)

17 : tu kespa ta 「毎年」<tu 「二つの」(千歳方言), kespa 「毎年」(千歳方言), ta 「に」(千歳方言)(ただし, こういう結合は未見)

18 : re kespa ta 「毎年」<re 三つの(千歳方言)

19 : kamuynomi wa 「神を祭って」<kamuynomi 「神を祭る」(千歳方言), wa 「て」(千歳方言)

20 : ne yakne 「ならば」<wa ne yakne 「ならば」(千歳方言)

21 : husko eciw no 「いつまでも (?)」

22 : e-sik-

23 kama nankor na 「見守って下さい」<e- 「おまえが」(静内方言),

sikkama「守る」(静内方言), nankor「だろう」(静内方言), na「よ」(静内方言) (「子」は不明)

不明な点も多いが、概略、「はるばる海を越えて来たお酒が手に入ったので、御幣を立てて神様にお供えます。いつまでも毛皮が取れるように見守って下されば、毎年、神様をお祭りするので、いつまでも見守って下さい」という内容のようである。上の例から明らかなように、句の長さが一定に揃えられた一種の韻文であることが窺われ、また、人称接辞に関する情報も含まれており、単なる語の羅列ではなく、この時代の祈り言葉の一端をある程度正確に示した、貴重な資料ではないかと思われる。「蝦夷記」には断片的ながらこの種の祈り言葉や、お悔やみの言葉のテキスト等が他にも含まれており、言語学的な観点からだけでなく、民族学的な観点からも注目すべき文献と言える。

4. まとめ

詳細な分析は今後の課題であるが、このような簡単な紹介でも、「蝦夷記」がアイヌ語研究上、極めて優れた重要な文献であることの一端を示すことができたと思う。それらをまとめると以下ようになる。

- 1) 書写の年代が明白である。
- 2) 収録語数が比較的多い。
- 3) 語彙だけでなく、多数のテキスト資料も含んでいる。
- 4) 明らかな誤写も認められるが、現代のアイヌ語とは異なる、古い時代のアイヌ語の特徴を示すものではないか、と推測される特徴を含んでいる。また、それらのいくつかは、他の古いアイヌ語資料の記載とも一致する。
- 5) 現在では知ることが極めて困難な、地方、場面による言語的な差異を示したと見られる注記を多く含んでいる。
- 6) 少なくとも一部は、アイヌ語の専門職である通詞によって書かれた資

料と考えられ、旅行者による記録と異なり、より信頼性が高い可能性がある。

以上から、「蝦夷記」の研究によって、今後、これまで知られていない古い時代のアイヌ語の言語的事実が解明される可能性が十分にあることが明らかとなったと思う。

5. おわりに

本稿によって、「蝦夷記」の主要な特色は示し得たと思うが、今後は、表記に関する体系的な調査を進め、テキストを含めた内容全体のより正しい理解に向かって一層の努力を行いたいと考えている。

謝辞

このような貴重な文献の閲覧、撮影に際し、文庫長をはじめとして光丘文庫は筆者にあらゆる便宜を惜しまれなかった。また、同文庫古典籍調査員佐藤景子氏のご自身の所蔵する光丘文庫に関する貴重な資料を快く筆者に恵まれた。なお、古辞書の原表記の確認作業に際し、高田智和氏（北海道大学大学院博士課程）のご教示を受けた。ここにお名前を記して厚く感謝申し上げる。最後になったが、アイヌ語を教えていただいた千歳方言話者白沢ナベ氏、沙流方言話者上田トシ氏、静内方言話者織田ステノ氏にも深く感謝申し上げる。

参考文献

- Batchelor, J. 1938. *An Ainu-English-Japanese Dictionary*. 4th ed. Tokyo: Iwanami-shoten.
- チースリク, H. 1962. 『北方探検記』. 東京: 吉川弘文館.
- 知里真志保. 1954[1976]. 「分類アイヌ語辞典第三巻人間篇」. 『日本常民文化研究所彙報』

68. 東京：日本常民文化研究所。(知里真志保、『知里真志保著作集』別巻Ⅱ，東京：平凡社，1976 所収.)
- 土井忠生，森田武，長男実（編訳），1980，『邦訳 日葡辞書』，東京：岩波書店。
- 服部四郎，1960，『言語学の方法』，東京：岩波書店。
- 服部四郎（編），1964，『アイヌ語方言辞典』，東京：岩波書店。
- 北海道（編），1969，『新北海道史』7，札幌：北海道。
- 北海道（編），1970，『新北海道史』2，札幌：北海道。
- 井上宗雄他（編），1999，『日本古典籍書誌学辞典』，東京：岩波書店。
- 国書刊行会（編），1906，『続々群書類従』9，東京：国書刊行会。
- 国書研究室（編），1989，『補訂版 国書総目録』1，東京：岩波書店。
- 国書研究室（編），1990，『補訂版 国書総目録』7，東京：岩波書店。
- 久保寺逸彦，1992，『久保寺逸彦編アイヌ語・日本語辞典稿』，札幌：北海道教育委員会。
- 馬淵和夫，1973，『和名類聚抄古写本声点本文および索引』，東京：風間書房。
- 中川裕，1995，『アイヌ語千歳方言辞典』，東京：草風館。
- 大谷洋一，2003，「松島トミさんの口承文芸5」，『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』9，札幌：北海道立アイヌ民族文化研究センター，81-116。
- Radlinski, I. 1891. *Słownik narzecza ainów*. Kraków: Akademia umiejętności.
- 齋藤美澄，1920，『贈正五位本間四郎三郎光丘翁事歴』，酒田：山形県飽海郡私立學事會。
- 酒田市立光丘文庫，1967，「館報ひかりがおか」，酒田：酒田市立光丘文庫。
- 酒田市立光丘文庫，1986，『酒田市立光丘文庫所蔵漢籍分類目録』，酒田：酒田市立光丘文庫。
- 酒田市立光丘文庫，1988，『酒田市立光丘文庫所蔵国書分類目録』，酒田：酒田市立光丘文庫。
- 酒田市立光丘文庫，2001，『光丘文庫探訪』，酒田：酒田市立光丘文庫。
- 酒田市史編さん委員会，1987，『酒田市史』改訂版・上巻，酒田：酒田市。
- 佐佐木信綱，1925，『百代草』，東京：私家版。
- 佐藤知己，1995，『「蝦夷言いろは引」の研究』，札幌：北海道大学文学部。
- 佐藤知己，1998，「天理大学付属天理図書館所蔵「松前ノ言」について(1)」，『北海道大学文学部紀要』46-3，札幌：北海道大学文学部，41-64。
- 佐藤知己，1999，「天理大学付属天理図書館所蔵「松前ノ言」について(2)」，『北海道大学文学部紀要』47-4，札幌：北海道大学文学部，53-88。
- 佐藤知己，2003，「彰考館旧蔵アイヌ語テキスト「蝦夷チャランケ並浄瑠璃言」について」，『北海道大学文学研究科紀要』109，札幌：北海道大学大学院文学研究科，31-58。
- 田村すず子，1996，『アイヌ語沙流方言辞典』，東京：草風館。
- 田中聖子，佐々木利和，1985，「近世アイヌ語資料について——特に『もしほ草』をめぐる」，『松前藩と松前』24，松前：松前町。

天理圖書館善本叢書和書之部編集委員会(編). 1976. 『類聚名義抄』. 天理：天理大學出版部.

鳥居龍藏. 1903. 『千島アイヌ』. 東京：吉川弘文館.

上原熊治郎. 1792. 『藻汐草』. (一冊, 市立函館図書館所蔵, 所蔵番号, 00388/005/ 3 /001).

山田忠雄. 1968. 『元和三年版 下学集』. 東京：新生社.

不詳. 1731. 「津輕一統志」. 『新北海道史』2 所収).

不詳. 1795. 「蝦夷記」. (酒田市立光丘文庫所蔵, 分類番号 726).